日本人の忘れもの
NIHONJIN NO WASUREMONO
第2部　忘＝筆　森清範　清水寺貫主
50

多様性の意味

金子みすゞさんの詩に「みんなちがってみんないい」という一節がある。多様性の大切さをこれほど端的に表現したことばはない。この世の中にあるものは、それぞれちがっていて、それぞれの役割をもって存在している、ということであろう。多様性に対立するのは、一様性あるいは画一性である。現在、世界経済を中心に進行しているグローバリゼーションは、世界をある意味で画一的にしようとする動きである。そのような社会では支配とコントロールのために、いくつかの限られた指標による序列化を伴っている。「○○ランキング○位」が流行るのは、このような社会である。SMAPの歌、「世界に一つだけの花」は「ナンバーワンよりオンリーワン」と唄って、このようなグローバリゼーションの動きに伴う画一的な価値観ではなく、多様な価値観を主張して、多くの人々から共感を得た。

自然の画一化は、同時に地域の文化や風土の多様性の破壊をもたらしている。（油やしプランテーション／マレーシア）

安成哲三
総合地球環境学研究所所長

自然と社会の多様性の尊重は、地球の歴史が作り出した豊かな自然と人類が末永く共存するための心構え。

丸い地球は極から熱帯までの気候の違いを作り出す

では、なぜ多様性が大切なのだろうか。それは人間社会の生存基盤である地球の自然の多様性から来ていると私は考える。丸い地球は極から熱帯までの気候の違いを作り、海陸の分布は、東西方向にも大きく異なる気候を作り出し、地軸の傾きは季節の変化を作っている。このような気候の分布は、多様な生物相を作り出し、その多様な自然の恵みを受けつつ長い年月をかけて作られた人類は、多様な社会と文化を築いてきたわけである。

私たちが住む日本列島は、米国のカリフォルニア州にすっぽり入ってしまうほど小さいが、北海道から沖縄まで、多様な気候と生物相に恵まれている。この多様な自然の恵みを長い年月をかけて利用することにより、地域ごとに多様な風土と文化が生まれている。山登りが好きな私は、山の自然に加え、立ち寄る山麓の町や村の景観や文化の違いや、それぞれに特有な産物なども楽しんできた。

京都では、まだいろんな物産・商品を扱う小売店が存続している

しかし、最近は日本各地の都市を訪ねても、駅前風景の画一的なことにがっかりする。どの駅でも東京に本拠をおく大手デパートやスーパーが駅前の一等地を占め、昔ながらの地元の商店街の多くはシャッターを閉じている。千年の都・京都では、幸いまだ、細々といろんな物産・商品を扱う多様な小売店がそれなりに存続しているが、その背後には、多様な農林水産業とモノづくりがあることを忘れるべきではない。

グローバリゼーションによる自然と社会の多様性の喪失は、世界的に進行している。多様な樹種を持つ東南アジアの熱帯林は、訪れるたびに広大な油やし林やゴム林に変えられている。自然の画一化は、同時に地域の文化や風土の多様性の破壊をもたらしている。画一的な自然と社会は、気候変動や極端な気象現象などの、環境変動に対して脆弱であり、生じる被害も大きくなる。そのような環境変動そのものも、巨大化した人類の活動により顕著になってきていることを、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）などは指摘している。つまるところ、自然と社会の多様性を大切にすることは、やや大げさに言えば、46億年の地球の歴史が作り出した多様で豊かな自然と人類が、末永く共存できるための必要な心構えではないだろうか。

◉やすなり・てつぞう
1947年、山口県生まれ。京都大理学研究科博士課程修了。筑波大地球科学系教授や名古屋大地球水循環研究センター教授などを歴任後、2013年、総合地球環境学研究所所長に就任。専門は気候学・気象学。現在は、地球環境を包括的に調査分析する地球環境学の分野でも活動。秩父宮記念学術賞、水文・水資源学会国際賞など受賞多数。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。（毎週日曜日に掲載します）

きょうの季寄せ（六月）

咆えてもみよ
往きては復る
泥田の牛

西東三鬼

機械を入れやすく圃場整備が完うされた今日では、代掻きを牛や馬がしている光景はまず見ることがない。田掻牛、田掻馬は歳時記上のことである。

掲句、黙々と代掻きに勤しむ牛への愛情が激情なって感情移入される。

老生昭和三十四、五年の句の「泥田出て馬の眼黒し桐の花」は、水郷潮来での叙情である。

（文・岩城久治）

「きょうの心伝て」50

脇野由香
主婦（京都市山科区／51歳）

茄子の花　茄子の棘

昨夏、鮮やかな小茄子が涼しげにスーパーの棚に並んでいた。この鮮やかさを残したまま浅漬けを作ってみようと思った。かわいい小茄子には似つかわしくない鋭いへたの棘が、爪のすき間に入った。小さいなりをして刺さるとけっこう痛いものだ。棘抜きを使ってみてもうまく抜けない。

指をくわえて考えていたときに、「棘が刺さったら蜂蜜をぬってみたらとれるよ」と、昔祖母が話していてくれたことを思い出した。中学生だった私は、当時あまり関心を示さなかった。お盆に精霊馬を作りながら教えてもらったことの一つだった。

「親の意見と茄子の花は千に一つも徒はない」。子供の頃、両親から叱られることがあれば、幾度となく祖母は私にこの言葉を教えてくれた。心が波立つことがあっても忘れてはいけないこと、大切なことを暮らしの中で伝えてきてもらった。そんなことを思い出しているうちに、指からは溶けるように棘が浮き出した。

「きょうの心伝て」募集

◉あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか？暮らしの中で忘れてはならないと思う日本人の心の系譜や、伝えたい京都に残る心遣いなどをお寄せください。京都新聞社で選考、添削する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル（12文字以内）と本文（400文字以内）、郵便番号、住所、氏名（匿名は不可）、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝て」係まで。
Fax：075-222-2200
E-mail：wasuremono@mb.kyoto-np.co.jp
◉日本人の忘れもの 第2部」のバックナンバーは、京都新聞ホームページでご覧いただけます。
http://kyoto-np.jp/kp/kyo_np/info/nwc/

この本が、日本人が未来に再生するための救世の書となることを願う。
（梅原 猛）

中西　進　京都市中央図書館館長
中村昌生　京都工芸繊維大学名誉教授
井上八千代　京舞井上流五世家元
山折哲雄　宗教学者
冷泉貴実子　冷泉家時雨亭文庫常務理事
池坊由紀　華道家元池坊 次期家元
上村淳之　日本画家
益川敏英　名古屋大学 素粒子宇宙起源研究機構長
森　清範　清水寺貫主
千　宗室　裏千家家元
大西清右衛門　釜師
養老孟司　京都国際マンガミュージアム館長
園城三花　ソロフルート奏者
金剛永謹　能楽金剛流宗家
森田りえ子　日本画家
上田正昭　京都大学名誉教授
瀬戸内寂聴　作家
髙橋英一　瓢亭十四代主
山本兼一　作家
山口富蔵　御菓子司「末富」当主
小山勝二　京都大学名誉教授
山極寿一　京都大学教授
中村玉緒　女優
白幡洋三郎　国際日本文化研究センター教授
田中耕一　島津製作所フェロー
伊藤唯真　浄土門主・総本山知恩院門跡
中村敦夫　俳優・作家
村井康彦　京都市芸術文化協会理事長
菅原信海　妙法院門跡門主
木津川　計　雑誌「上方芸能」発行人
千　宗守　武者小路千家家元
森口邦彦　染色家（人間国宝）
浅見和彦　成蹊大学文学部教授
鷲田清一　大谷大学教授
杉本秀太郎　フランス文学者
中島貞夫　映画監督
中辻憲夫　京都大学 物質―細胞統合システム拠点長
松浦俊海　壬生寺貫主
笹岡隆甫　華道「未生流笹岡」家元
伊東久重　有職御人形司
尾池和夫　財団法人国際高等研究所所長
九條道弘　平安神宮宮司
半田孝淳　天台座主
水谷幸正　学校法人佛教教育学園相談役
龍村光峯　織物美術家
井波律子　中国文学者
新木直人　下鴨神社宮司
片山九郎右衛門　能楽 シテ方
佐野藤右衛門　「植木屋」
村上和雄　筑波大学名誉教授
梅原　猛　哲学者
市田ひろみ　服飾評論家・エッセイスト
丘　眞奈美　京都ジャーリズム歴史文化研究所
堀木エリ子　和紙デザイナー
西川千麗　日本舞踊家
上村多恵子　京南倉庫株式会社代表取締役
南　久美子　遊墨漫画家
森　小夜子　人形作家
永田　萌　イラストレーター・絵本作家
木下明美　ジャーナリスト
平林幸子　京都中央信用金庫専務理事
永田　紅　歌人
金剛育子　能楽金剛流宗家夫人
植木朝子　同志社大学文学部教授
濱崎加奈子　伝統文化プロデュース・連代表
村松栄子　小説家
木積凛穂　書家
木下豊子　佐川印刷株式会社取締役副会長
福原左和子　箏曲家
森　悠子　ヴァイオリニスト・長岡京室内アンサンブル音楽監督
藤吉紀子　京都府立大学キャンパスライフアドバイザー
杉本節子　奈良屋記念杉本家保存会常務理事・料理研究家
内田奈織　ハープ奏者
白石孝子　フルート奏者・指揮者
高尾美智子　寺田バレエ・アートスクール校長
河原林春陽　国際墨アート作家
國生義子　ボーセレン・アーティスト
浦沢美奈　フラワー・コーディネーター（ブーゼ代表）

混迷の現代、さまよい続ける「日本」。
将来の指針を「京都のこころ」に求め、
わが国各分野第一線の英知が示す提言
京都新聞「日本人の忘れもの 京都、こころ ここに」
第1部連載を収録。

京都新聞社

日本人の忘れもの
京都、こころ ここに

京都新聞社 編

原田裕子　竹中木版 竹笹堂 六代目摺師
武智美保　アートプロデューサー
平山みき　歌手
山岡祐子　白川書院「月刊京都」編集長
中村宗哲　千家十職塗師
千　和加子　茶道武者小路千家家元夫人
松永智美　ジュエリー作家
桑原櫻子　桑原専慶流副家元
村田京子　料亭「菊乃井」女将
土手素子　長楽館館主
田中峰子　西陣暮らしの美術館「富田屋」代表
宇津崎光代　ミセスリビング代表取締役
服部和子　服部和子きもの学院院長
星　由里子　女優
武田道子　医療法人財団康生会武田病院名誉院長
田中田鶴子　学校法人大和学園名誉学園長
水野加余子　京都女性スポーツの会会長
栗栖晴子　料亭「本家たん熊」女将
西村明美　「柊家」女将
西川　充　日本舞踊家・NPO法人京都文化企画室理事長
田端泰子　京都橘大学名誉教授
井澤國子　株式会社 井澤屋
田中恵厚　宝鏡寺門跡
河瀬直美　映画作家
◎執筆者肩書きは「京都新聞」紙上掲載時点のものです。

絶賛発売中

定価＝1,890円　A5判 248ページ／オールカラー
お求めは、書店、京都新聞販売所、京都新聞文化センター、京都新聞出版センター（http://www.kyoto-pd.co.jp/）などへ。

京都新聞出版センター

おきざりにしてしまったものがある。今、日本が大切なものに気づきはじめた。『ここころ ここに』。京都が育んだ文化という「ものさし」が、時代に左右されない豊かさを示す。